

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。  
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

**\***: 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

**CC**: 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

: パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

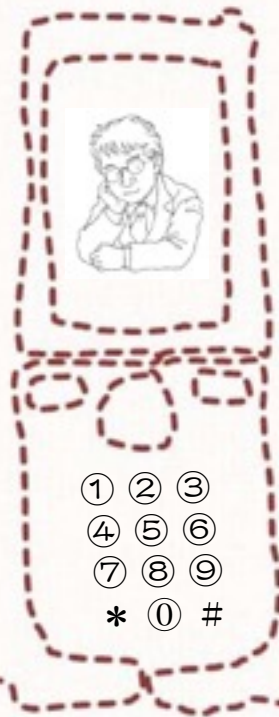
なし: 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。  
無償で、非営利的かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 UTokyo OCW 朝日講座「知の冒険」  
Copyright 2015, 佐藤健二

The University of Tokyo / UTokyo OCW The Asahi Lectures “Adventures of the Mind”  
Copyright 2015, Kenji Sato



mobile-phone 時代と

他者認識の変容

: Transitioning Perception  
of Others

佐藤 健二 (University of Tokyo)

# 0-1. “ケータイ化”する言語空間

No 3 / 20

佐藤健二

『ケータイ化する日本語』

大修館書店、2012年

[http://](http://www.taishukan.co.jp/book/b198203.html)

[www.taishukan.co.jp/  
book/b198203.html](http://www.taishukan.co.jp/book/b198203.html)

- 1 「ケータイ」を通じて「ことば」を考える
- 2 ことばは「身体」である
- 3 ことばは「社会」である
- 4 ことばは「空間」である
- 5 ことばは「歴史」である
- 6 メディアとしての「ケータイ」
- 7 「二次的な声」と分裂する空間
- 8 空間共有の成功と失敗：テレビ電話の示唆
- 9 留守番電話と間違い電話：浮遊する声
- 10 他者の存在の厚みあるいは第三者の位置
- 11 呼び出し電話の消滅と電話の家庭化
- 12 移動する電話：あるいは電話の個人自由
- 13 面で触れあうことと線でつながること：他者関係の変容
- 14 ケータイ・メールの優越：「文字」の距離を選ぶ
- 15 ケータイ・メールで書く：「文字の文化」からの断絶
- 16 ケータイ化する日本語：ふたたび「身体」としてのことばに

## ① 声の身体性と社会性

社会的空間とはなにか／共鳴と意味／「空気」の意味／他者の思考や感覚を理解すること／「歴史」としての言語と社会／ことばの基本的な身体性

## ② 電話と空間との関係

どんな変容が起こりつつある？／メディアとしての電話／身体と空間との間／電話は空間の経験のしかたを大きく変えた／視覚的想像と聴覚的想像とのズレ

## ③ 変容しつつある他者の感覚

身体とともに動く個人化した機器／親しきはより親しく／未知のひとと対話する力の衰弱／共有空間をどうつくるか／第三者としての他者の存在の重要性

## 人類史的 パースペクティブ

Figure is from Leroi Gourhan 1964 “Le geste et la parole”

著作権等の都合により、  
ここに挿入されていた画像を削除しました。

アンドレ・ルロワ＝グーラン  
『身ぶりと言葉』

荒木亨訳、ちくま学芸文庫、2012年  
p.79、8「さまざまな機能のタイプ」

原著：André Leroi-Gourhan  
LE GESTE ET LA PAROLE - TOME 1,2  
Albin Michael, 1964, 1965

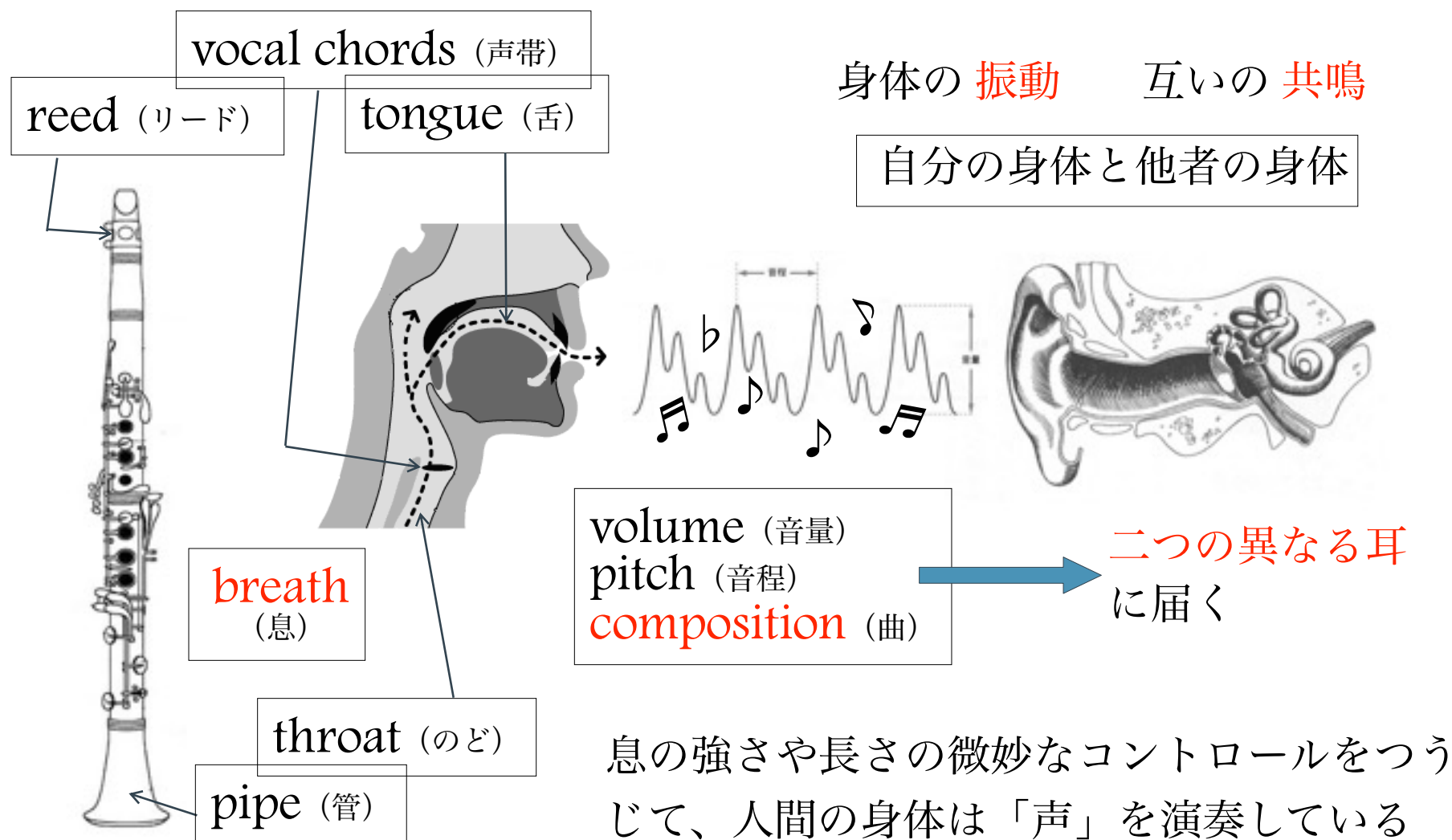
人間の声は、身体を媒体としてつくりだされた。  
それは人間という動物が進化を通じて獲得した、  
原初的でユニークな道具であった。

ことばをとらえる **4つの枠組み**

- (1) ことばは「身体」である
- (2) ことばは「空間」である
- (3) ことばは「社会」である
- (4) ことばは「歴史」である

# 1-2. 音楽としてのことば

No 6 / 20



# 1-3. 声 と 空間としての言語

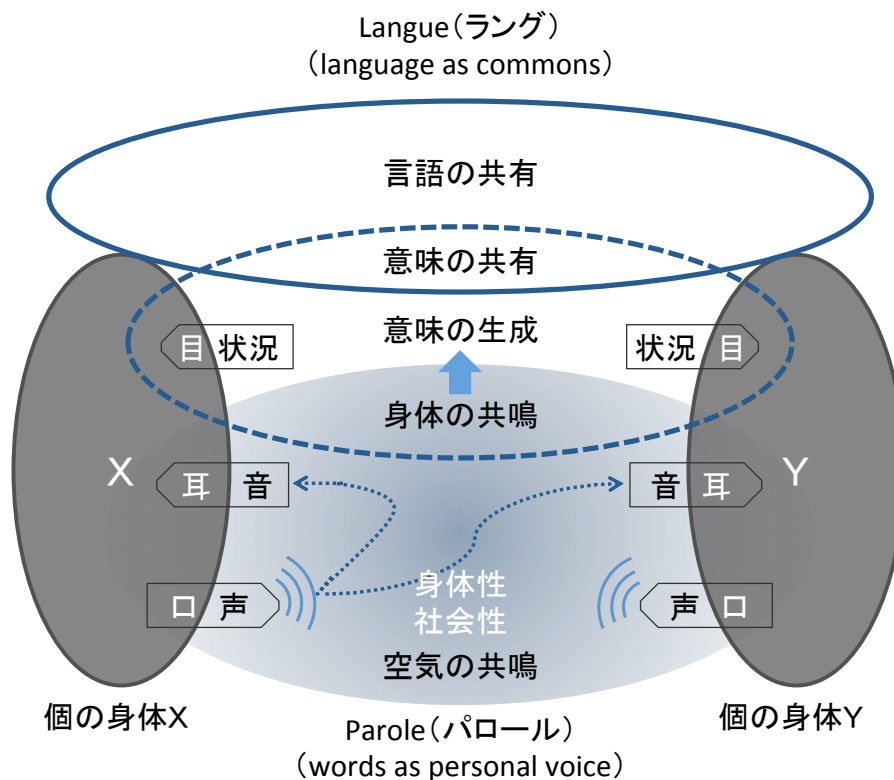
No 7 / 20

Diagram 1

1) 共有されているもの：  
**空気の共振**／身体の共鳴、  
他者との共存／共有された  
社会資本としての言語

2) 声の空間的特質：  
一種の **共有空間** ／  
第三者や傍観者を巻き込む

3) 拡張された身体：  
声は直接の身体性をもつ／  
ことばは「**身体の拡張**」でもある



# 1-4. 拡張された身体として

No 8 / 20

## ① ことばはもうひとつの「手」である

伝達の機能／現実の手は「物体」をつかむ／ことばは形がない「イメージ」や「概念」をつかんで渡す／意識や意味を操作することができる

## ② ことばはもうひとつの「脳」である

思考の機能／ことばは記憶を引き出す索引／編集し、書きなおす／リストとして全体を把握する／新しい理念の構築／書くことで論理や分析を生み出す

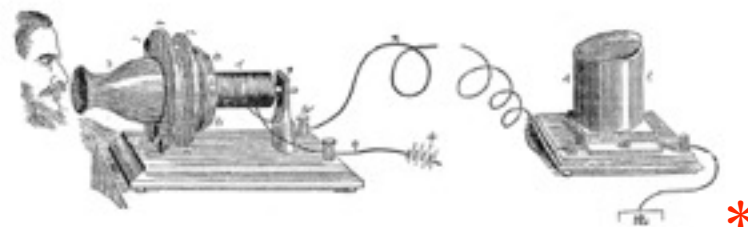
## ③ ことばはもうひとつの「皮膚」である

感覚の機能／センサーとして／皮膚は環境世界と自己との境界／ひとは冷たいことばに傷つき、温かいことばに癒される／愛や悲しみをことばで感じ分ける



## 2-1. 電話が生みだした新しい空間

No 9 / 20



メディアは空間を拡張する。その拡張は、つねに不均質である。  
引き延ばす／ゆがめる／近づける／重ねる／切り離す.....  
電話はいかなる空間を社会にインストールしたのだろうか？



複製技術のひとつであること  
距離の感覚と経験とを変えたこと  
「二次的な」声であったこと  
「二次的な」身体性と社会性の関係



しかし「リアル／バーチャル」ではとらえられない質も

## 2-2. 分析の二つのポイント



Image by kazutan3@YCC, from フォト蔵  
CC BY-NC-ND 2.1 JP



Image by ProhibitOnions  
from Wikimedia Commons



Image by ProhibitOnions  
from Wikimedia Commons

他者との関係：論点は二つ

1) われわれは電話で **想像された** 他者と話している。なぜなら相手は直接に **見えない** から。だから、この空間において生みだされた想像の形態は経験的な分析の対象となりうる。

2) 電話のコミュニケーションは、受話器をにぎる二者関係として分析されやすい。しかしながらこの分析枠組みは**第三者**あるいは傍観者の重要な役割を見落としている。そして、われわれの空間経験のなかに生まれた**他者との亀裂や距離感**を見落としやすい。

## 2-3. 見ることから切り離されて

No 11 / 20

1) テレビ電話のパラドクス：情報量と自然さ

2) 遠隔地中継における微妙なタイムラグ

3) 「もしもし」の呼びかけ：未知と緊急性

4) 「間違い電話」の示唆

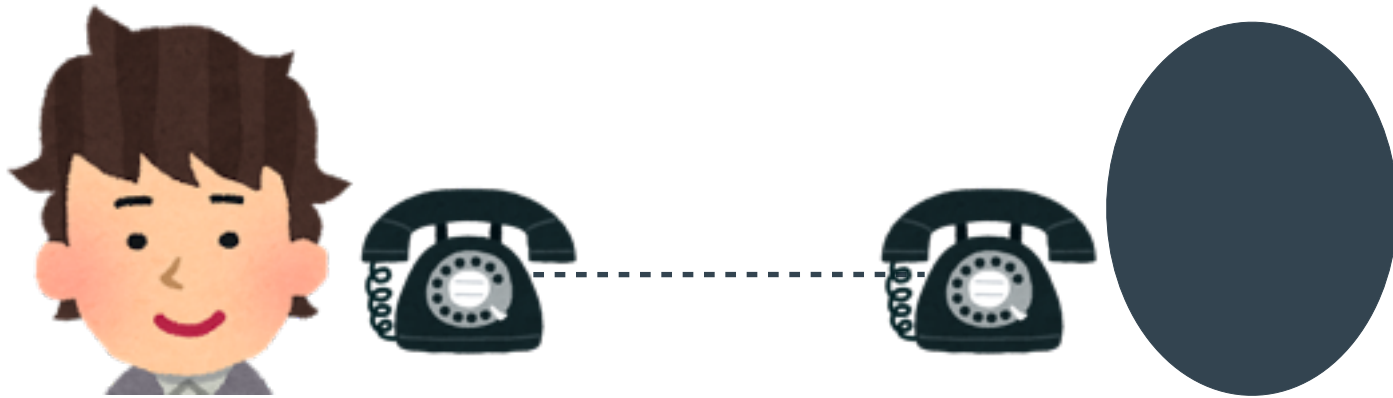
5) 「留守番電話」の話しにくさ

6) 視覚が遮断されていることの自由

## 2-4. 他者との関係性をめぐって

No 12/ 20

「伝統的」な固定電話は、かつてさまざまな他者を巻き込んだシステムであった。たとえば、電話交換手の存在や「呼び出し電話」の習俗など。電話をかけるという実践は、あったこともない人と話さなければならないことを含んでなりたっていた。そうした経験は、敬語や外向きのことばの話し方の習得ともむすびついていった。

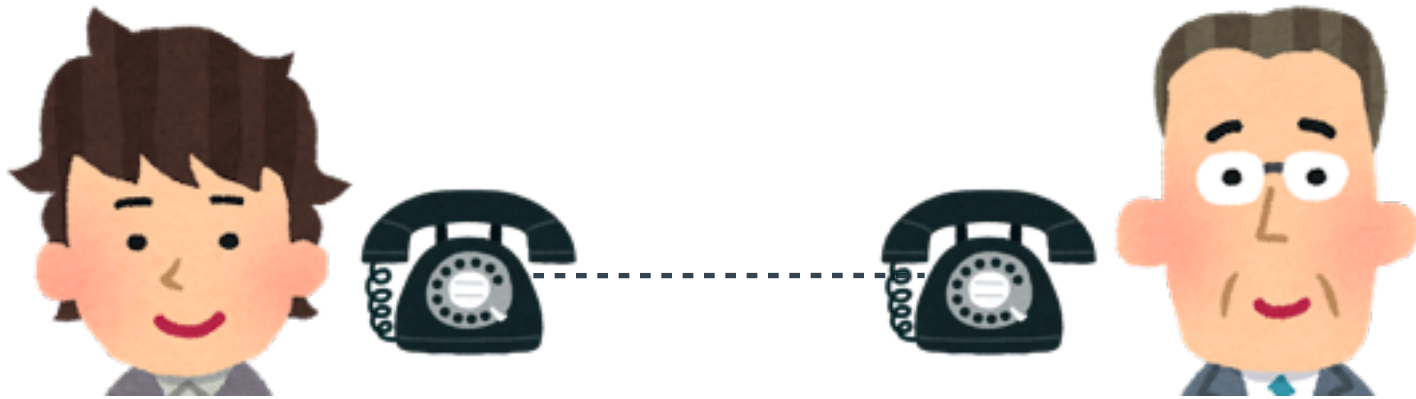


\* イラスト : [irasutoya.com](http://irasutoya.com)

## 2-4. 他者との関係性をめぐって

No 13/ 20

「伝統的」な固定電話は、かつてさまざまな他者を巻き込んだシステムであった。たとえば、電話交換手の存在や「呼び出し電話」の習俗など。電話をかけるという実践は、あったこともない人と話さなければならないことを含んでなりたっていた。そうした経験は、敬語や外向きのことばの話し方の習得ともむすびついていった。

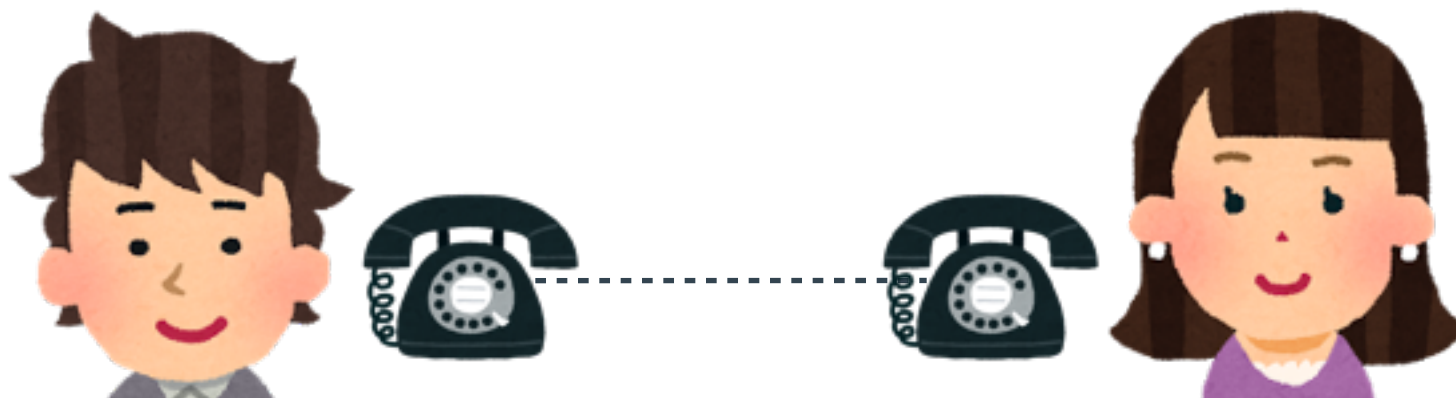


\* イラスト : [irasutoya.com](http://irasutoya.com)

## 2-4. 他者との関係性をめぐって

No 14/ 20

「伝統的」な固定電話は、かつてさまざまな他者を巻き込んだシステムであった。たとえば、電話交換手の存在や「呼び出し電話」の習俗など。電話をかけるという実践は、あったこともない人と話さなければならないことを含んでなりたっていた。そうした経験は、敬語や外向きのことばの話し方の習得ともむすびついていった。



\* イラスト : [irasutoya.com](http://irasutoya.com)

## 2-4. 他者との関係性をめぐって

No 15/ 20

「伝統的」な固定電話は、かつてさまざまな他者を巻き込んだシステムであった。たとえば、電話交換手の存在や「呼び出し電話」の習俗など。電話をかけるという実践は、あったこともない人と話さなければならないことを含んでなりたっていた。そうした経験は、敬語や外向きのことばの話し方の習得ともむすびついていていた。

しかしながら、ケータイ電話の発達は、**直接に相手につながることを当然にし**、未知の他者とそのなかで出会い、交渉する経験を減らした。そうした社会的な原子化あるいは個人化は、人びとから **ことばの政治力** もしくはことばで交渉し、ことばでさぐる力を衰弱させたのではないか。

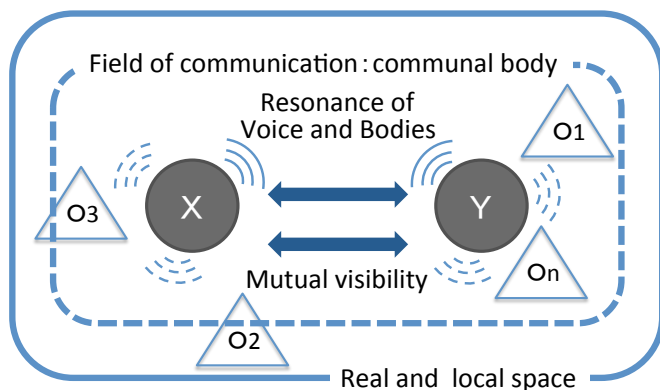
その反面において、**既知の親しい人びとのあいだはもっと親しく**、つねにつながっていることで安心をもたらすような共同性をもたらした。

## 2-5. 第三者の存在の重要性

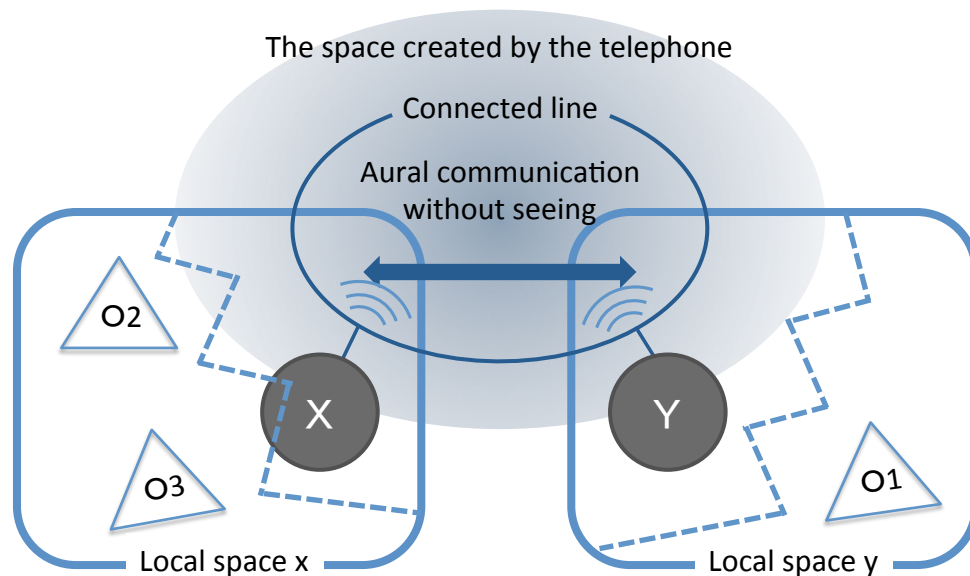
No 16/ 20

### Model 1: space of the voice

もし第三者がただ聞くだけでなにも話さないとしても、空間を共有している。沈黙もまた意味あるものとして共有されうる。



### Model 2: space of the telephone



電話テクノロジーは、どこかコミュニケーションのとらえ方を二者間の関係に**限定**する。



# 3-1. ケータイ化することば

No 17/ 20

ケータイはいかに人間のコミュニケーションを拡張するか？  
ケータイはことばの身体性や空間性をいかに変容させたか？

印刷は書かれたものの複製を通じて、共有された「想像の空間」をことばを読むことと書くことのなかに生みだした。

電話は声の複製技術で、共鳴のなかに新たな「想像の空間」をつくりだす。  
ケータイ電話の普及は、伝統的な固定電話がつくりあげた社会的な「想像の空間」を、その不十分さのまま拡張したのである。

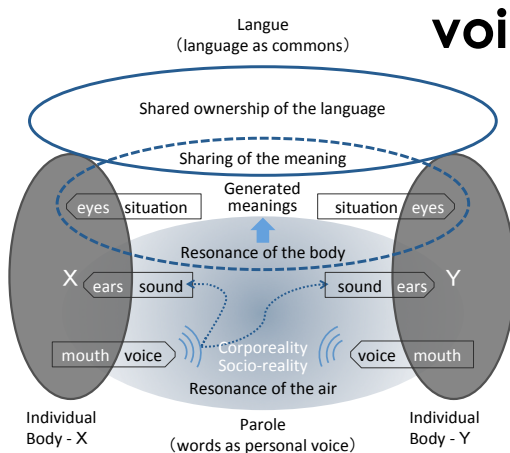
ポイントは、コミュニケーションを支えている「想像の空間」の重要性。  
そして、話すこと／聞くこと／書くこと／読むことを含むコミュニケーションすることが、ことばをつうじていかなる空間をつくりあげるか？

## 3-2. 他者の厚みの喪失

No 18/ 20

言語は人間という動物が進化を通じて獲得した根源的な道具である

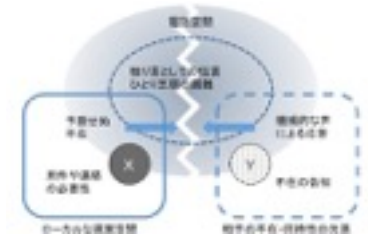
留守番電話や間違い電話にともなう  
不機嫌・不快



voice

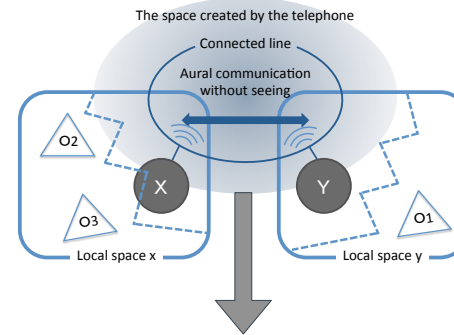
想像が他者と共有される  
空間の重要性

話すこと



telephone

第三者の排除



mobile-phone

もともと人間の「声」は第三者が巻き込まれる **共同体的な空間** を生み出す現象

互いの **身体の共鳴** という根源的な **社会性** を有する

"line" (線) でつながるバラバラな **自己**  
**第三者** の役割の縮小

他者の存在感覚の **Thinness** (衰弱・平板化)

# 3-3. もういちど、ことばに力を

No 19/ 20

しかしながら「他者の衰弱」や「公共性の喪失」という苦境を乗り越える力もまた、身体性に根を有し、想像力の翼をもつ「ことば」によって育てられる。それは技術の問題ではなく、ことばが関わる社会学的な課題である。

二つの問題。

新しいことばを工夫する想像力と、ことばを身につける力の衰弱。  
すなわち新語を生み出す力が空洞化していることと、ことばを身体経験として学ぶ力が衰えていることである。

見えない、あるいはバーチャルな、もうひとつの「手／脳／皮膚」としてのことばの力の再発見に、あらためて期待するところもまさしくそこにある。

- ① コミュニケーションにおける「第三者の存在」の重要性について、君たちはどう思うか？
- ② ケータイ（あるいはスマホ）というメディアは、他者とのどんなつながりを生み、どんな社会をつくりあげるだろうか？  
君たちの考えを聞かせてほしい。